

元生薬研究塾

別府 秀彦
(衛生学部5回生)

同窓会事務局

丸田 一皓
(衛生学部1回生)

新春に総長藤田啓介 七栗祈念室を リニューアルオープン

七栗祈念室増設・改修の経緯

学園創設者 故 藤田啓介総長(本文では生薬研究塾塾頭として塾生である学生・教員と、研究と日常生活を共に過ごされた親しみを込め「藤田先生」と呼称します)が1973年に開設した生薬研究塾(註1)(写真1)は、藤田先生のご逝去後に改称と移転を繰り返しながら、2017年3月藤田記念七栗研究所(写真2 a,b)を最後に、45年間の歴史に幕を下ろしました。この七栗研究所の1室に藤田啓介博士七栗祈念室が開設されたのが2016年4月のことです(写真3)。しかし翌年、七栗研究所の閉鎖によりこの祈念室の継続すら危ぶまれる状況になりました。

2017年5月、当時の小野雄一郎理事長、星長清隆学長から、閉鎖された研究所の空室を同窓会が活用することで七栗祈念室の増室が可能なのではないか、とのご助言をいただきました。

祈念室の増床によって、藤田先生の約28年に及ぶ七栗での足跡を示す多くの遺品を紹介することが可能になります。直ちに、七栗



写真1



写真2a(手前建物1,2階)



写真2b



写真3

記念病院施設課、本部総務部、藤田学園同窓会に相談を重ね、祈念室増設の準備にとりかかりました。そして、ご遺族様からも、明らかな私物を除いた遺品のほとんどを快く寄贈して頂くことができました。

藤田先生の生涯において、最も長く過ごされたのが旧三重県久居市の藤田学園 七栗学綜(現 七栗校地;写真4)です。ここは学長・学園理事長・総長としての学園づくりの思索の場であり、学者として研究に没頭された場であり、教員や学生に自ら基礎医学研究の情

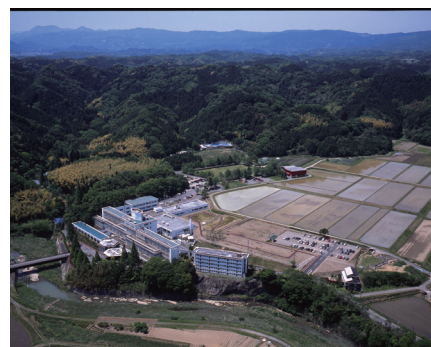


写真4

熱を注がれた場所でもあります。

2007年8月豊明校地に開設された獨創一理祈念館が藤田先生の『邂逅・教え・思索』『言霊の語り』の場であるのに対して(写真5)、平成31年新春にオープン予定のこの祈念室は藤田先生のお人柄、ご遺徳を偲ぶ品々や、学園づくりの歴史的資料、研究業績、多数の学生、教職員、来訪者と語り合うその時々写真が約200枚ものパネルにして展示されています(写真6)。

これにより同窓会初代同窓会会長である藤田先生の教えは、豊明校地『獨創一理祈念館』に続き、2017年3月21日に旧生薬研究塾庭園に建立された七栗校地『総長藤田啓介祈念碑』(写真7 a,b)、そして新たに七栗校地『総長藤田啓介七栗祈念室』に継承されるこ



写真5



写真6



写真7a

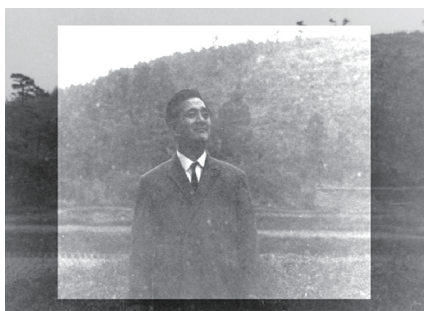


写真8a



写真10



写真7b



写真8b



写真11

とになりました。

七栗祈念室の展示物の概要

七栗祈念室に展示される写真や遺品の品々は、藤田先生が七栗で過された足跡と生薬研究塾の変遷(註2)の歴史的記録でもあります。藤田先生が38歳頃に初めて訪れた七栗の当時の様子(写真8a)、山里の谷間を整地し七栗学綜として造成、学綜の拠点である生薬研究塾の開設、教職員、学生のための宿泊施設や温泉入浴施設、プール、キャンプ場などが次々と増設されていく様子を豊富な写真や動画、資料などで知ることが出来ます(写真8b,c)。さらに七栗バーデンバーデン構想で最初に手掛けられた七栗サナトリウムの開院の様子、七栗記念病院に発展するまでを写真で紹介しています(写真9)。

この間、藤田先生は、多くの文化人、著名人、有識者の皆さんと歓談されています。その方々からしても、豊明校地の校舎校庭が学風を反映する立派な建物に比し、七栗の質素な住宅や執務室をご覧になり驚かれることもありました。藤田先生はこの七栗の谷間の自然と名湯七栗の湯(写真10)を愛でておられ、ここを『終の栖(すみか)』として過ごされました。また俳優仲代達矢氏、作家曾野綾



写真8c



写真9

子氏、日本医師会長武見太郎氏、国際的な研究者達からのお手紙の一部を展示しております(写真11)。また、多くの国内外の訪問者は贈答に美術品や工芸品などを、あるいは教職員が学会、海外研修旅行の報告時に土産を持参されることが多く、これらの品々もその一部を2番目の部屋に展示しました(写真12)。

また、3番目の展示室には藤田先生と学生と交流を描いた写真を展示しました。1978年から始まった全学新生入生オリエンテーショ



写真12

ンでは、学校・学部毎の新生入生は七栗を訪れ、学生PSA委員、教員とともに2泊3日の野外テント、飯盒炊飯のキャンプを行いました。藤田先生のキャンプ場での歓迎挨拶のお姿や肉声に触れた思い出をもつ卒業生には、大変に懐かしい情景を再現しております(写真13a,b)。

この行事で七栗を訪れた教職員学生は約20年間で1万数千人とされています。さらに千名以上にも及ぶ衛生学部と短大の卒論研究生や看護科学生・保健師実習生が病院実習をしながら、宿舍生活を過ごしました。さらには藤田先生ご逝去後も、七栗で学び、寮生活を過ごしたりハビリテーション学科、看護学科の病院実習生も千名以上にのぼり、それぞれの時代の額入写真が残されています(写真14)。

4番目の展示室には、藤田学園づくりに寄せて『負けてたまるか



写真13a



写真13b



写真14

りすにごちけり 七栗の谷』総長 藤田啓介。これは七栗に慈しみを注がれる藤田先生が68歳(1993年3月)の生誕月に詠まれた句です。この色紙が、藤田先生のご遺影の傍らに掲揚されております(写真15)。

同窓会の皆様が七栗の谷に思いを馳せ、七栗祈念室を見学された



写真15

折りには、学生に送るメッセージを記した藤田先生自筆の書きかけの原稿や、研究成果の論文の下書きなどを直接目にされることと思います(写真16)。その時に改めて藤田先生の存在や思いを感じ、未来へ繋いでいく自信に満ちた力が湧き出てくることを願っております。

最後に豊明校地にある獨創一理祈念館と七栗校地にできた総長藤田啓介七栗祈念室が、共に藤田先生と繋がる尊き空間(註3)であることを祈念いたします。

最後に、総長藤田啓介七栗祈念室改修開設にあたり、学園長小野雄一郎先生、理事長・学長星長清隆先生、藤田学園同窓会松山裕宇会長と同窓会役員の皆様、七栗記念病院園田茂院長、本部総務部、施設課辻岡副部長、旧研究所教職員の皆様に感謝申し上げます。

(註1) 本学園創設者故藤田啓介先生は1971年に医学部設置認可が適い、それまで中断していた生命科学の研究活動を再開するための拠点を模索されていました。1973年、現三重県津市久居に理事長・学長の執務室も兼ねた生薬研究塾を開塾されました。さらに温泉施設、プール、合宿所、キャンプ施設を併設し七栗学綜と命名された。1995年6月11日、我々は予期せぬ藤田先生の突然の訃報に接し、深い悲しみに包まれました。主のいない生薬研究塾の建屋はそのまま暫定的に豊明校地総合医科学研究所生薬研究塾研究部門(永津俊治所長兼任)、1998年藤田記念生薬研究所(葛谷博磁所長)に改称、2004年藤田記念七栗研究所(園田茂所長)に改称されました。

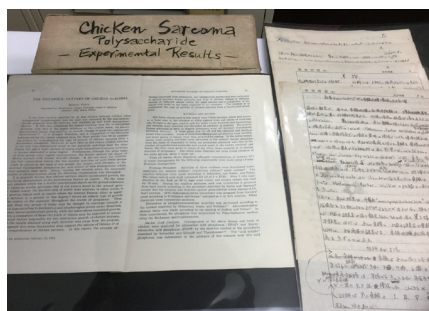


写真16

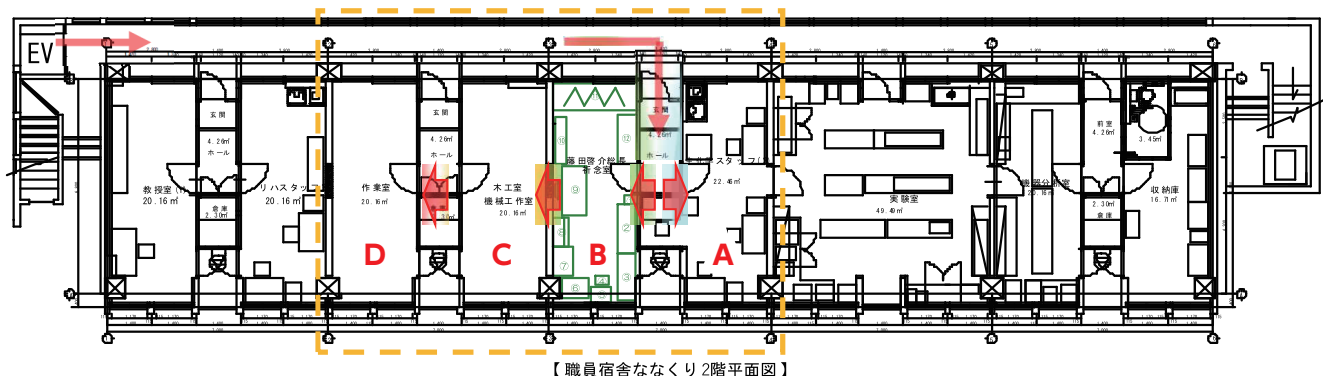
(註2) 一方研究塾建屋の耐震構造脆弱が問題となり、移転が決定し研究塾の歴史を閉じることとなりました。その代替として2014年七栗サナトリウム病院宿舍ななくりの1, 2階を改修した新たな藤田記念七栗研究所に継承され、生化学研究部門とリハビリテーション研究部門の研究活動が進められていましたが、3年後の2017年3月にこの研究所も閉鎖されました。1973年から2017年3月までの45年間引き継がれた藤田啓介先生の生化学講座も終焉を迎えることとなりました。

藤田啓介先生七栗祈念室は、ご存命であった1995年までに七栗で藤田先生と接した卒論実習生、病院実習生、PSA キャンプ参加全学校・学部生、合宿参加クラブ・同好会、教職員や七栗訪問者、七栗サナトリウムの職員など多数の七栗訪問者を写真に収めた情景をパネル写真で紹介しております。またそれ以降今日までの研究所や七栗サナトリウムから七栗記念病院の様子などの変遷を紹介しております。

(註3) 豊明校地にある獨創一理祈念館は藤田先生が私学人として立派で優れた良き医療人として社会に貢献できる使命を果たすために、我自らを知り、我自らを見る可我見(かがみ)の空間として建立されたもので、言霊(ことば)のメッセージを感じ取る空間に対し、七栗祈念室は藤田先生の学者、教育者としてのお人柄を感じ取る空間を設けました。よって、この祈念館・祈念室は共に藤田先生の偉業、遺徳そしてお人柄を見学の皆様にお伝えできればと願っております。

エントランス：

宿舍ななくりのエレベータ2階から黒タイルでセパレートされた通路を七栗祈念室エントランスに向う途中、彫刻家山本真輔氏作「白い朝の乙女」像が目に入ります(写真17a)。エントランスのドアを開けると、左側面に七栗校地の航空写真パネル、右側面に宮田雅之作の切り絵「四季」の写真パ



記念室を4つのゾーンに分ける構想

Aゾーン 歴史の場: Bゾーン 思索の場: Cゾーン 交流の場: Dゾーン 遺品の場:

図1 展示室(ゾーン)の概要

ネル、そして正面に学園創設者藤田啓介総長先生の笑顔の写真と対面します(写真17b,c)。



写真17a

Aゾーン:

エントランス左がAゾーンです。3つのテーマから構成されています。藤田先生が七栗を訪れた、昭和39年頃の風景を眺めている写真や造成工事の様子の写真を紹介するコーナ(写真18a)。七栗バーデン・バーデン開発構想建設パーツ写真の展示、生薬研究塾の開設から七栗サナトリウムの開院式風景、その後の七栗記念病院までの変遷を写真パネルで紹介するコーナ(写真18b)、生薬研究塾での藤田先生と卒論研究生との研究室情景、当時研究に使用した研究機器と器具、リハ装具類の一部を展示したコーナ。また藤田記念七栗

研究所生化学研究部門、リハビリテーション研究部門教職員のスタッフ写真や研究風景を紹介するコーナーで構成されています(写真18c,d)。

Bゾーン:

藤田啓介先生と交流のあった方々からの工芸品、美術品、書などを展示するコーナーとして、文化人と藤田先生との書簡のやり取り、映画監督黒沢明氏の映画赤ひげのスチール写真恵贈の秘話を展示しました。また大学を興した稀な熱血漢と紹介されている書籍、偉大な教育者として玉川学園総長小原国芳氏が藤田先生を称えた書



写真17b



写真18a



写真18c



写真17c



写真18b



写真18d



写真19a



写真20a



写真21



写真19b



写真20b

籍、名古屋大学医学部生化学講座堀田一雄教授一門として紹介された記事なども展示しました。また桑原幹根元愛知県知事からの贈呈の書やお二人の写真などが展示されています。また、藤田学園理事長に30歳代で就任するのを嫌った藤田先生が、同郷の元国鉄総裁で新幹線生みの親の十河信二氏に面会し、理事長就任を嘆願された時の写真が紹介されています(写真19a,b)。

Cゾーン：

毎年、藤田先生が「師弟同業」の精神で新入生オリエンテーションの七栗行事として実施していた野外キャンプ場の紹介コーナーです。教職員、先輩、新入生が触れ合った写真と当時使用したキャンプ用品を配置しました。生薬研究塾卒論研究生、看護実習生、リハ実習生などの寮生活をスナップ写真で紹介しました。入寮した個室のドアに掲げられた退寮時の言葉を記したメッセージボードの展示コーナ、藤田先生とゼミ旅行や誕生日会などの写真を紹介したコーナを設けました(写真20a,b,c,d)。

動画再生視聴スペース：

藤田先生を撮影した動画や藤田先生が脚本された『聴感啓示』ほか、学園の歴史フィルムをDVD



写真20c



写真20d

化した作品が閲覧できるスペースを設けています。(写真21)

Dゾーン

藤田先生の1967年から1995年までの生薬研究塾での理事長・学長・講座教授としての執務資料などを展示しました。

また名古屋大学医学部第一生化学講座で手掛けられた基礎医学研究の資料や直筆の生原稿、あるいは鳥津製作所と開発されたティゼリウス電気泳動装置とその分析結果の泳動写真などとその論文化し

た生原稿が残っています。藤田先生の学者としての才能が25-30歳の若き時代に、終戦間もない実験器具のない時から創意工夫されていたのが伺えます。またこのゾーンには藤田先生のご趣味の音楽再生装置や当時珍しいビデオデッキのないところにUマチックの再生装置でカラヤンなどのビデオ画像、レコード、CDなど見聞きし、人里離れ娯楽のない夜のひと時を喜んで見聞きしていました。そのような思い出のある学生には懐かしい展示品です。

またほかのコーナーには、藤田先生がご逝去された1995年6月の3か月前に行われた藤田先生の70歳お誕生日会を豊明校地スタッフ館2階で行った時の写真が展示されています。この年の卒論実習生から花束を贈呈され、優しく挨拶されている様子が残されています(写真22a,b,c,d,e)。

最後に藤田啓介先生七栗祈念室がリユアル・オープンとなり、藤田先生と学生との触れ合いの場面を多数写真で公開できました。平成10年ごろまでの在学生は、七栗野外キャンプを全員経験しました。藤田先生は、共同生活はつらいことがあっても連帯感が育まれ、チーム医療に繋がることを信じ師弟同業の実践として考えておられました。毎年4月中旬から5月中旬の新入生歓迎野外キャンプ開催時期は、総長藤田啓介先生自ら陣頭指揮をとり七栗生薬研究塾教職員全員と、豊明校地の引率の先生方と共に過ごされました。その様子など展示パネルにできなかった写真がアルバムにたくさん残っております。その時々時代に七栗を訪れた同窓会の皆様には、



写真22a



写真22c



写真22e



写真22b

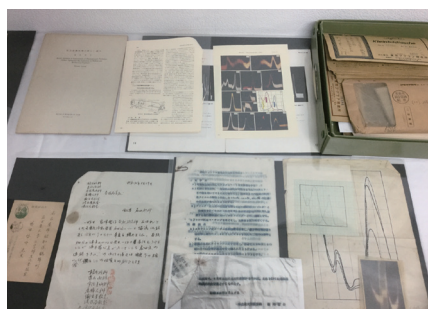


写真22d

是非機会を設けられて、七栗校地をご訪問ください。キャンプ場周辺の自然は今も変わりません。生薬研究塾は無人化していますが風景は今も変わりません。卒論生、病院実習生、ポリクリの医学生、研修医の皆様も数日滞在された方も是非七栗祈念室のご訪問を願っております。あなたが写っている写真があるかもしれません。